むかし「局アナ」いま「隠居」

ハンカチ

上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住

■京都大学農学部林学科卒業
■元朝日放送アナウンサー
■元池田マルチメディア代表取締役
■講演、朗読指導など以外は隠居中

デパートや喫茶店など、公共性のあるトイレで用を足していると、「ガーッ」と大きな音がしてオシッコが止まりそうになったことが何度かありました。

「高い器械買うて、無駄な電気使うて、勿体ないなあ。ハンカチくらい持っとれ」

原発が怖い私は心の中で毒づくのです。

最近、ハンカチも持たず世渡りする人が増えたのか、オシッコのあと手を洗って今度は大便コーナーに入り、トイレットペーパーで手を拭いて、大便器で流す人が増えましたが、落とし紙で手を拭くのは行儀が悪いし、紙も勿体ない。それを流す水も勿体ない。濡れた手を乾かす機械も勿体ないし、電気も勿体ない。

ハンカチは地球に優しい偉大な布きれなのです。

その偉大な布が「靴箆(くつべら)」に使えると知ったのは、私が新人だった頃、海軍兵学校出身の大先輩が宿直勤務を終えて、サンダルから靴に履き替えるとき四つ折りのハンカチを靴の踵に当ててスルッと履いたのです。

「カッコエエなあ」

感服した私は、いまでもハンカチで靴を履くことがありますが、こういうのは行儀が悪いのでしょうねえ。

＊

「忘年会や歓送迎会などが催される日、女子社員は、必ず白いハンカチを持って出勤しなければならない」

そんな話を耳にしたのは、一九六〇年頃のことだったと思います。

サントリーがポスターに起用したモデルのスキャンダルで堂島の本社へ取材に行ったことがありました。

人事課長にインタビューしたあと、雑談していたのですが、そんなとき私が、

「わが故郷 徳島では宴会のフィナーレは、阿波踊りで〆(しめ)るんですよ」

と郷土自慢をしたところ、課長さんがこんな話をしてくれました。

「上田さん、実は我が社には、宴会がお開きに近づくと、必ず「ラバウル小唄」を歌う部長がいましてねえ。涙を浮かべながら絶唱するとき女子部員一同がハンカチを振らなきゃいけないんです。

だから宴会の日は女の子も純白のハンカチを用意してましてねえ。部長の哀しい習性に合わせてハンカチを振るんですよ」

昭和一桁(ひとけた)生まれの私には痛いほど解ります。そして私も同じ歌が歌えるのです。

♪

さらばラバウルよ
また来るまでは…

＊

部長さんは、きっと「大正生まれ」だったのでしょう。

特攻隊員の生き残りか、そうでなければ、出撃する仲間に手を振り帽子を振り、ハンカチを振った 整備士だったに違いありません。

苦労人の部長さんだけにお人柄がよく女子社員にも人気があったはずです。

しかし、ハンカチを振る宴会は女子社員からすれば迷惑だったと思うのですが、それを 優しく受け入れたサントリーの大和撫子(やまとなでしこ)には感謝の念を禁じ得ません。

ハンカチや帽子を振って特攻機を送ったのは、今の政治家が生まれる前か精々ガキだった頃の話です。

そして部長が女子社員にハンカチを振らせた時期も、戦争による心の傷痕がまだ癒えていない時代でした。

まぁ近ごろは癒え過ぎて、憲法よりも閣議決定が上だなんていう御時勢ですから。

＊

話は変わりますが、私が四歳半だった一九三八年(昭13)、父がポーランドの大使館付(つき) 武官を命じられ、一家でワルシャワ暮らしをすることになりました。

父はギンギンの職業軍人でしたから、身なりなんぞ全く無頓着な無骨者なのに、事もあろうにヨーロッパで外交官みたいな生活をせよと命じられたわけです。

タキシードを着て各国の武官夫人とダンスをしたり、下戸なのにワインを飲んでフランス語で歓談したり…、そんなパーティーが明け方まで続くことも珍しくありませんでした。

ヨーロッパではレディーファーストです。

玄関に入るときや、車に乗るときは、ドアを開けて、「どうぞ」…と女性を先に通さなければなりません。

明治生まれの陸軍将校にとって こんな行為は 屈辱そのものでしょう。

夫婦でパーティーの席に招ばれたときなど、会場のドアを手で抑えながら、「コラッ、早う通らんか」

妻の耳元で 忌々しげに囁いたそうです。

そんな父でしたが、鼻をかむ方法はヨーロッパ風がピッタリ来たようでした。

つまり あちらでは、上流階級の人でも鼻紙は持たず、ハンカチで「チーン」と鼻をかむのです。

テレビで観たのですが、「三大 テノール」の一人、カレラスさんも舞台の最中、ハンカチで「チーン」と鼻をかんだあと颯爽とズボンのポケットにハンカチをねじ込んでいましたもの。

ズボラだった父にとって、ハンカチで堂々と鼻をかむ風習は気に入ったようで、帰国してからも、ずーっと鼻をかむときはハンカチを使っていました。

子供の頃、父がズボンのポケットから ハンカチを無造作に取り出して、私の顔や手を拭いてくれたものですが、父の鼻汁が乾いて強ばりついた 皺だらけのハンカチは ネズミ色…。

いくら父親でも、キモチ悪かったですねえ。

「ネズミ色」のハンカチでは小説も映画も歌も、相手にしてくれないでしょうが、「黄色い」ハンカチは映画になりました。

「幸福の黄色いハンカチ」…健さんの有名な映画です。

映画には さほど詳しくないので断言できませんが、題名に「ハンカチ」がついた映画は、この「黄色」だけではないでしょうか。

歌謡曲だと「赤」で有名な曲がありました。

裕次郎の「赤いハンカチ」

♪

あの子がそっと
瞼を拭いた…

…それが「赤い ハンカチ」だったのです。

太田裕美の「木綿のハンカチーフ」も涙でしたねえ。

都会へ出て行った恋人に裏切られてしまった娘が、

♪

最後のわがまま
贈り物をねだるわ
ねえ…

…こう言って薄情な恋人に求めたのは涙を拭くための「木綿の ハンカチーフ」…だったのです。

題名にハンカチが入ってなくても歌詞にハンカチが出てくる曲なら いろいろあるでしょう。

例えば一九五〇年発売の「水色のワルツ」はこうです。

♪

君に逢う嬉しさの
胸に深く
水色のハンカチを
ひそめる慣わしが…

＊

ところが、四年後に出た「高原列車は行く」の中では、ハンカチが「ハン[ケ]チ」になっていました。

♪

汽車の窓から
ハン[ケ]チ 振れば
牧場の乙女が
花束 投げる…

＊

そういえば この二つの曲が流れていた戦後 暫く、「ハン[ケ]チ」と言う人が結構いたような気がします。

今は「ハン[ケ]チ」なんて言う人は殆んどいませんが、私が若い頃は「ハン**カ**チ」と「ハン**ケ**チ」が混在していた時代だったのではないでしょうか。

そもそも「ハンカチ」とは[handkerchief]なる英語が語源であり、[kerchief]は「スカーフ」のことです。[handkerchief]の[hand]にアクセントがありますから、それ以外の母音は曖昧母音になります。

つまり[ker]は「カ」でも「ケ」でも、どっちでもいいということなのでしょう。

＊

芥川龍之介が一九一六年、「手巾」なる短編を書いて、この二文字を「ハン**ケ**チ」と読ませています。

また、一九〇九年に出た漱石の「それから」の中では、「手巾」ではなく、「手帛」と書いて芥川同様「ハン**ケ**チ」と読ませていたことからも、大正時代は全て「ハン**ケ**チ」だったのでしょう。

むかし局アナだった私は、「手巾」「手帛」をハンカチと読めますが、漱石も芥川もそれほど読んでないのです。

農学部で砂防工学を学び、自然科学信奉者だった私は、何となく小説を絵空事扱いする傾向がありまして…。

反省せんといけませんな。